

# 古来風体抄の古筆切

—中世期の享受本文として—

日比野 浩 信

「歌の史的研究の嚆矢」<sup>(1)</sup>ともいふべき古来風体抄の伝本は、大きく初撰本と再撰本とに分類される。初撰本は式子内親王に奉られたもので、その序文に

建久ときこゆるとしの八とせふんづきのなかのとをかこころ、くさのいほりゆふ風すゝしく、こけのそでもあさつゆしげきにつけてするすみもかつあらはれ、おいのふでのあともいとゝみだれながらしるしをはりぬるになん。この集をば名づけて古来風體抄と名づくといふことしかり。

とあり、跋文には

生年已八十四にて、かきつけ侍ことゝもいかばかりひが事おほく侍らんと申かぎりなくはおもふたまへながら、おもふところにまかせてかきしるし侍りぬる。ゆくすゑのうしろめたさこそあさましくさふらへ。

として、俊成八十四歳の建久八年（一一九七）七月二十日の日付けが見られる。一方の再撰本<sup>(3)</sup>は、跋文に

此草紙の本體は、かのみやよりおほきなる草紙をたまひて、かやうの事かきて奉れと侍りしかば、たゞその御さうしにかきみてむとばかりにて、何となきよしなし事をおほくしるしつけ侍りしなり、そのうへに生年已八十四の年、人にもみせだにあはせ侍らず、たゞあさきみづくきの跡にまかせてしるしつけ侍りにしかば、いかばかり僻事はおほく侍らむとおぼえ侍るを、又御覽ぜむと侍れば、今更になほすべきにあらず、又おなじ事をしるしつけ侍る心のはかなさ、申すかぎりなくこそかたはらいたく侍れ。これかきしるしいで侍りし事も、又五年にまかりなりにけり。

建仁元年五月日

とあり、初撰本から五年後の建仁元年（一二〇一）年五月に成ったようである。再撰本跋文では初撰本を指して「此草紙の本體」とし、「今更になほすべきにあらず、又おなじ事をしるしつけ侍る心のはかなさ、申すかぎりなくこそかたはらいたく侍れ」とするところから、大きく変更されていないかのようなのであるが、再撰本では歌数の減少などの違いがある。現存伝本のほとんどが、再撰本の系統であり、中には「中間本」と位置付けられた伝本も報告されている<sup>(4)</sup>。

言うまでもなく、冷泉家時雨亭文庫には、初撰本の原本たる俊成自筆本が伝存しているが、その存在は広く知られていないわけではなかったらしい。由阿の詞林采葉抄<sup>(5)</sup>には、長歌短歌の説をめぐって、俊成が古来風体抄では、短歌は万葉集の記述に従って三十一文字の歌をいうと述べていながら、自身の撰になる千載集卷第十八では、いわゆる長歌を「短歌」としていることを受けて、

是則先年為世卿、古来風躰者非<sup>ト</sup>尺阿之作<sup>ニ</sup>勅答申サレタリシ故<sup>ニ</sup>被<sup>レ</sup>背彼抄歟。然而去嘉曆三年<sup>ニ</sup>故藤谷黄門<sup>為相卿</sup>、以<sup>二</sup>三尺

阿自筆ノ古来風牀<sup>一</sup>、於<sup>二</sup>黒戸御前<sup>三</sup>被備<sup>二</sup>後醍醐院叡覽<sup>一</sup>之後、止<sup>二</sup>彼邪論<sup>三</sup>訖。

とする逸話が残されている。為世は、古来風体抄は釈阿すなわち俊成の作ではないと勅答していたのに対し、為相が俊成自筆本を後醍醐天皇の叡覧に備えたことで、作者論争に終止符が打たれたというのであろう。俊成自筆本が、為相の冷泉家に秘蔵されており、為世はその存在を知らなかったことが判るが、建久八年以降、江戸初期に穂久邇文庫蔵本<sup>(6)</sup>が書写されるまでの四百年の間、自筆本系統たる初撰本の本文が享受された明白な痕跡は見あたらない。

著者自筆本が存する場合は、それが最も拠るべき本文であるとするのは当然のことであり、古来風体抄といえは、まずこの自筆本に拠ることになろう。ただ、そのために他の現存伝本や、系統間の異同にはさほど注意が向けられなくなってしまうことがあれば、享受という側面からは危惧されるべきことである。

のみならず、自筆本を除く現存伝本のほとんど全てが近世期の書写本である。すなわち、中世における古来風体抄の享受本文の実態は不明瞭で、他の歌学書への引用文<sup>(7)</sup>にその片鱗をうかがう以外にないというのが実情で、何より再撰本をその原型にまで遡らせて考えることは、現時点では困難と言わざるを得ない。初撰本と再撰本との相違は、「俊成の傾向を知る上にも注意すべき」<sup>(8)</sup>であると言えながら、片や自筆原本が伝存し、片や近世の書写本ばかりというのは、あまりに検討の材料たる資料の質に差があると言わざるを得ないのである。

そこで本稿では、古来風体抄の古筆断簡を集成し、若干の検討を加えておきたい。中世における古来風体抄の享受本文の実際を示すものであり、特に再撰本の成立と近世期の書写本との時間的空白を少しでも埋める為の足がかりとなればと考える次第である。

古来風体抄の古筆切としては、現時点で以下の三種類が管見に入った。

A 伝後光厳院筆切

B 伝高倉永康筆切

C 伝蟬川親当筆切

Aは国宝手鑑にもある著名な切、Bは小林強氏によって報告<sup>⑤</sup>されてはいたが、個人蔵ということもあつて図版などは無く、実態を知るのが困難であつた切、Cは従来報告が無かつた切である。

なお、稿者に古来風体抄の伝本を隈なく調査・校合した上で系統を明確化するだけの準備がない。よつて、初撰本は冷泉家時雨亭文庫蔵俊成自筆本<sup>⑩</sup>に拠り、再撰本は『日本歌学大系』所収本を用いて、適宜、岩波文庫本・続群書類従本を参照し、中間本は『歌論集一』所収本を用いた。また、言うまでもないが古来風体抄は、その大半が万葉集と、古今集以下千載集までの勅撰集からの抄出であり、和歌（及び、詞書・作者名）の異同は、古来風体抄としての違いなのか、典拠歌集との接触など享受間に生じたものかの判断が困難であり、できるだけ序文や施注本文など、俊成執筆箇所を重視したい。ただ、そのような箇所を見出し得ていないB伝高倉永康筆切・C伝蟬川親当筆切では、やむを得ず抄出本文における比較となつてしまったことをお断りしておきたい。

## A 伝後光厳院筆切

後光厳院を伝称筆者とする古来風体抄切は八葉が管見に入つた。全て下巻の断簡である。以下に掲出するうち、⑤は国宝手鑑『翰墨城』所収、⑤と⑦が『古筆学大成』に掲載されており、この二葉は、小林氏の報告にもある。もとは四半形の冊子本で、一面十行。和歌を一行書としているが、一行に収まり切らなかつた場合の一、二文字を下書き風にしている。後光厳院の真筆との確証はないが、書写年代は後光厳院の活躍期と同じく、南北朝期頃とみてよからう。先述のように古

来風体抄の伝本は、そのほとんどが近世の書写本であることを鑑みるに、南北朝期の書写に掛かる当該断簡は、俊成自筆本を除いては格段に古い書写本の断簡である。ただし、筆者には異伝があり、八葉のうち①と③では、後伏見院を伝称筆者としている。もともと、後伏見院の真筆でもなく、時代的にも後伏見院の活躍期である鎌倉期にまで遡り得るものではないであろう。よって伝後光厳院筆切として掲出することとする。

ところで、翰墨城の複製解説では⑤を「尾張切」の名称で掲出している。尾張切は、『新撰古筆名葉集』の後光厳院の項に「四半古今又後撰」とあって、さらにその下に、四〇五字程度の抹消が黒塗り状に施されている。明治版と安政版で同様にあり、文化版・文政版の『古筆名葉集』では、後光厳院は立項されていない。ために、削除箇所がどのような記事であったのかは不明であるが、版本をただ削り取るだけではなく、入れ木をしてまで抹消痕跡を残した理由は定かではない。写本系の名葉集のうち『古筆家秘書』では「尾張切 八寸 五寸二分 十行」、『古筆切目安』では「尾張切 四半古今」、『古筆切名物』では「尾張切 四半 古今後撰 長八寸巾五寸二分」とある。当該古来風体抄切は一面十行詰、最大二十五センチ×十五・八センチで、仮に化粧裁ちなどがされていれば、「八寸」「五寸二分」ならば全く当てはまらないとはいえない。また、掲出②の断簡では、筆者未詳の極め札が付属しており、そこには「後光厳院 尾張切」と記されている。これは、②が丁度古今集歌掲出のはじめの部分でもあり、名葉集にいう「古今」に該当するものとして誤られたのであろうか。すると、名葉集の「古今又後撰」も、両集の抄出部分の断簡に基づく記述である可能性も皆無ではなからう。いずれにせよ、伝後光厳院筆古今集切・後撰集切をも合わせ、改めて検討せねばなるまい。ともあれ、「古今又後撰」と明記されている以上は、当該古来風体抄切に対して、尾張切の名称を用いるのは、ここでは避けておきたい。

さて、本文は以下の通り。なお、本文が欠損して判読できない場合は、現存本を参考に、概ねの文字数を□で補い、欠損した文字の字形がある程度残っている場合は枠内に示した。また、読解不能な文字を■とした。和歌には、便宜的に（ ）内に新編国歌大観番号を付した。

①個人所蔵切（二十四・七センチ×十五・八センチ）

古来風體抄下

またとし月のあらたまりかはるにつけて哥のすか

たことは、さま／＼におもひよそへられそのほとしなくもみ□

やうにおほゆへきものなり春のはしめゆきのうちよりも

さきいてたるのきちかき紅梅しつのかきねのむめもいろ□

こと／＼なからにほひはおなしくたおる袖にもうつりかほり身□

しむ心地するを花のさかりになれはよしの山のさくらはのこれ□

る雪にまかひまして雲ゐの花のさかりはしらくものか□な

れるかところもをよひかたきを春ふかくなるまゝ、□□

ゐてのやまふきにかはつ□□□□の藤なみにゆふへ□□

②個人所蔵切（二十五・〇センチ×十五・八センチ）

心もた、かやうによそへて意得れはまことにたかくきよ

けにもえむに優にもまたさまでならねとひとふしおかし

きさまもほと／＼につけてよそへられぬへきことなり

さていまは古今集の哥はしめよりところ／＼申侍へし

古今和哥集

春哥

ふるとしに春たちける日よめる

在原元方 棟梁男 業平孫

年のうちに春はきにけりひと、せをこそとやいはむことしとやいはん (二二五)

此哥まことに理つよく又おかしくもきこえてあり

③個人所蔵切 (二十四・八センチ×十五・〇センチ)

つらゆき

ゆふつく夜をくらのやまになくしかのこゑのうちにや秋はくるらん (二五八)

冬哥

題しらす

読人不知

おほ空の月のひかりしきむければかけみし水そまつこほりける (二五九)

むめの花それともみえずひさかたのあまきるゆきのなへてふれ、は (二六〇)

此哥人丸かうたと申

雪ふりてとしのくれぬる時にこそつゐにもみちぬ松もみえけれ (二六一)

④高城功一氏蔵切 (二十四・一センチ×十五・四センチ)

ぬのといひてあかてもなといへるおほかたすへて

ことはことのつゝきすかたこゝろかきりもなき哥なる

へし哥の本躰はたゝこのうたなるへし

羈旅歌

もろこしにて月をみてよみける

安陪仲磨

あまのはらふりさけみれはかすかなるみかさの山にいてし月かも (二六七)

おきの国になかされける時舟にのりていてたつ

とてよめる

小野篁

⑤翰墨城所収切（古筆学大成に掲出。⑥の直前）

ひとりぬる人のきかくにかみな月にはかにもふるはつ時雨かな (三一六)

やまにいとてよめる

増基法師

かみな月しくれはかりを身にそへてしらぬ山地にいるそかなしき (三一七)

題しらす

よみ人しらす

雪ふりてしのくれぬる時にこそつゐにみとりの松もみえけれ (三一八)

此哥古今にありかれはつゐにもみちぬとありそのことは

すこしいかにそきこゆるをこの集にはつゐにみとりの

とあるはよきにはたれと又もみちぬよりは心の



おとるなりいづれもいかにそおほえなから年寒して後

⑥個人所蔵切（二十四・八センチ×七・九センチ。⑤の直後）

松柏の、ちにしほむ事をするといふこゝろのいみ

しくていづれもえもらし侍らぬ也

戀歌

いひかはしける女のなをさりにいふにこそあめれと

いへりければつかはしける

⑦学士院藏群鳥帖所収切（古筆学大成に拠る）

をしへをくことたかはすはゆくすゑのみちとをくともあとはまとはし（三四〇）

已上後撰集

拾遺和哥集

春哥

平定文か家の哥合に

壬生忠峯

春たつといふはかりにやみよしの、やまもかすみてけさはみゆらん（三四一）

承平四年中宮賀の屏風の哥

⑧個人所蔵切（二十五・一センチ×十五・七センチ）

七夕

人丸

あまの河とをきわたりにあらねとも君かふなてはとしにこそまで（三五六）  
少将にて侍ける時こまむかへにまかりてよめる

大宰大貳高遠

あふさかのせきのいはかとふみならし山たちいつるきりはらのこま（三五七）

延喜御時月次御屏風哥

逢坂のせきのし水にかけみえていまやひくらむもちつきのこま（三六八）

このふた哥はとり／＼にまことにめてたきうたなり

屏風には八月十五夜池ある家にあそひしたる所を

したかふ

小林氏は⑤⑦に基づいて「初撰本」として報告しておられる。歌の出入りなどの顕著な異同箇所は見出すことができず、本文のあり方によって推測を試みるほかないが、まず、系統毎に分類可能な異同を掲出しておく。再撰本間で異同のある場合は、ここでは掲出していない。

1  
①  
L1

断またとし月のあらたまりかはる……につけて・

•  
•  
②

花もみち②

も  
再

つ、  
①初  
②中

2  
①  
L2

⑧断ことは、さま／＼におもひ

●  
●  
●  
●  
●  
●  
**(再)**

●  
申

3  
①  
L6

⑧花のさかりにな・れは

りぬ  
①中  
②再

4  
②  
L1

⑧ まことに・たかく

姿  
中  
再

5  
④  
L2

⑧ ころかきりもなき哥・なるへし

・なく侍る②

6  
⑤  
L11

[illegible]

- ・ し
- ・ か
- ・ う
- ・ し
- ・ て

後の

- ・ ち

・後・  
①初  
(傍書)

しかうして  
・  
④

しかうしてに②

7  
⑧  
L9

⑧屏風には八月十五夜

・ ・ ・ ・ 屏風に  
八月十五夜初  
(傍書)

•  
中  
再

当該断簡が、初撰本と一致し、再撰本や中間本とは異なる様相を呈している点是指摘し得るようである。右の用例中1の「つけて」「つけつ、」などは、近接する再撰本の異同を例示する都合上掲出したが、初撰本・中間本とは異なり、再撰本に近いように見える。しかし、「て」一文字と「つ、」二文字とを誤った、字形の類似による相違に過ぎまい。

当該断簡の独自異文もある。が、以下のようなものであり、助詞一文字のものがほとんどであり、その他も誤脱や読み癖の範疇として考えてよからう。

8 ① L3 断 ゆきのうちより・

も 初 中 再

9 ② L2 断 えむに・優にも

も 初 中 再

10 ⑥ L2 断 いみしくていつれ・も

を 初 中 再

11 ⑧ L8 断 このふた・・哥は

つ の 初 中 再

また、各々が異なる場合もある。

12 ② L8 断 業平・・孫・

朝臣 也 初

朝臣 ・ 中

・ ・ 也 再

つらゆき初

・貫之・中

紀貫之・再

他にも、ここには示さなかったが、系統分類の基準などとはしづらいような、助詞一文字程度の異同などの場合、再撰本に独自異文が多い。

こうしてみると、伝後光厳院筆切は、初撰本の系統の本文を伝えている可能性が高いといえよう。初撰本系統の伝本としては、俊成自筆本が伝わっているのであり、テキストとしての伝後光厳院筆切の価値は高いとはいえない。ただ、詞林采葉抄のエピソードにみるように、自筆本の存在そのものは広く知られていたわけではない。伝後光厳院筆切の存在は、自筆本そのものは広く知られていなくとも、他にも初撰本系統の本文が伝存していたという一面を物語っているのである。ともすれば「初撰本＝現存自筆本」として認識してしまいがちになるが、「現存自筆本」以外にも「現存自筆本と同じく初撰本系統の本文」が伝播していたという事実を確認できた。自筆本と穂久邇文庫蔵本以外にも、初撰本系統本文の享受がなされていたわけである。それでいて、必ずしも自筆本と一致しているわけでもない。伝後光厳院筆切は、享受の空白期ともいべき南北朝時代の本文の実際を伝えるものでもあり、低からぬ資料的価値を有するといつてよい。

## B 伝高倉永康筆切

伝高倉永康筆切が四葉、管見に入った。全て下巻の断簡である。うち、②③の二葉が、小林氏によって「再撰本」として報告されていたが、図版や本文は示されていないかった。

高倉永康の署名入り短冊と比べると同筆であり、永康の真筆と認められる。よって、書写年代は永康が没した永正九年（一五二二）以前、室町中期頃となろう。①の横幅は十八・九センチもあつて十二行、もとは横幅の広い冊子本だったように思われる。和歌の書き出し位置に比べて、詞書の書き出し位置が三文字ほど下げとなっており、和歌を一行書とする。和歌が行末に収まりきれなかった場合には、一文字乃至二文字程度を下草書風に書写する点や、文字が重なるように書かれている点（例えば、前の文字と同じ高さから書き出される「し」や、やや小さく右寄せにして次の文字と並べられた「と」、「の（能）（乃）」「れ」「は」などに次の文字が食い込むように書かれているなど）に書写上の特色がある。本文は以下の通り。

①個人所蔵切（二十三・七センチ×十八・九センチ）

詞花和歌集

春

堀川院御時百首哥めしけるととき立春のこゝ

ろをよみ侍りける

大藏卿匡房

こほりぬし志賀のからさきうちとけてさ、浪よする春風そふく（五二八）

寛和二年内裏哥合に

藤原惟成

昨日かもあられふりしはしからきのとやまのかすみ春めきにけり（五二九）

天徳四年内裏哥あはせに

平兼盛

ふる郷ははるめきにけりみよし野、みかきのはらをかすみこめたり（五三〇）

②高城功一氏蔵切（<sup>15</sup>？×九・五センチ）

世をそむかせたまひて後はなたち花を御  
らんして

花山院御製

やとちかく花たちはなはうゑてみしむかしをしのふつまとなりけり（五三九）

題しらす

よしたゝ

そまかはのいかたのこのうき枕夏はすゝしきふしとなりけり（五四〇）

③個人所蔵切（二十六・〇センチ×十五・八センチ）

百首歌たてまつりけるとき花のうた  
とてよめる

藤原季通朝臣

よし野山はなはなかはにちりにけりたえくのこる嶺のしらくも（五七八）

ほりかはの院の御とき百首のうちくれのはる  
の心をよめる

河内

けふくれぬ花のちりしもかくそ有しふたゝひ春は物を思ふよ（五七九）

夏哥

卯花の哥とて

④個人所蔵切（二十五・六センチ×三・九センチ）

たひしらす

としよりの朝臣

あはれに■みさほにもゆるほたるかなこゑたてつへきこのよと思に（五八七）

主な異同には、以下のようなものがある。

1 ① L3

⑧立春のこゝろをよみ侍りける

歌・・・・・・初

2 ① L7

⑧寛和二年内裏哥合に・・・・

霞をよめる⑨

3 ① L10

⑧天徳四年内裏哥あはせに

・初

4 ② L6

⑧・よした、

曾祢⑧

5 ③ L5

⑧百首のうちくれのはるの心をよめる

歌たてまつりけるとき・初

歌たてまつりける時・中



6 ③  
L10

断卯花の哥とて

・初 中

これらによって、当該断簡は、初撰本や中間本とは異なる本文であり、小林氏のご報告通り、再撰本系統と一致する本文を有していることが認められよう。ただ、他にも

7 ①  
L12

断みかきのはらを

が 中 再

8 ②  
L4

うゑてみし

をか 中

9 ③  
L5

ほりかはの院の

・ 中 再

のようなものがあり、再撰本と異なる箇所もあるかに見えるが、7・9は系統の相違による異同とは思われず、8は再撰本間にも「うゑてみし」とするものと「うゑおかじ」とするものがある。よって、これを以って再撰本系統であることを否定することにはなるまい。

伝高倉永康筆切は、筆者が明確で、書写年代を限定的に考えることが出来、また本文系統も明確である。自筆本以外はほぼ近世期の書写本という古来風体抄においては、現存本に比べてかなり遡る室町中期に存在した再撰本系統の實際を伝えており、再撰本系統本中では最古写本の断簡である事が指摘できよう。

## C 伝蜷川親当筆切

従来、全く報告のなかった古来風体抄切が管見に入った。蜷川親当を筆者と極める一葉。上巻の断簡である。仮に親当の真筆となれば、書写年代はその没年たる文安五年（一四四八）以前ということになるが、親当の署名入り短冊と比べると、類似した点はあるものの、同筆と断ずるには至っていない。真筆ではないとしても、室町中期を下るものではなからう。縦二三・四センチ×一七・一センチで、和歌を二行書とする十一行を書写しているが、料紙左端に次行の文字が切れ残っており、少なくとももう一行有ったことが判る。ここには「神のごときこゆるたきのしら浪のおもしろく君がみえぬこのころ（一四二）」の上句が位置するのであろうが、文字に掛かった状態で無意味に裁断する必要はない。手鑑への添付スペースの都合などもあったかも知れないが、上句のみの一行が残存しており、それを半端と考えての所作であろうか。少なくとも、上句のみの一行と余白があったとするならば、さらに二〜三センチほど横寸が大きかったと推測される。前掲伝高倉永康筆切と同じように、横幅の広い冊子本であったようである。さて、本文は以下の通り。

### ①個人蔵（二十三・四センチ×十七・一センチ）

#### 譬喩歌

くれなゐのこそめのころもしたにきる

人のみらくににほひいてんかも（一三八）

かくしてやなをやゝみなんおほあらきの

うきたのもりのしめならなくに（一三九）

已上第十一卷之内

寄物陳思

山代のいはたのもりにこゝろおそく

たむけしたれはいもにあひかたき（二四〇）

こゝろあへはあひぬるものを小山田の

シ、キタ  
鹿猪田もることもしもらすも（二四一）

現存本と比べて、以下のような異同がある。

①L6 断已上第十一卷之内

・  
・  
①初  
②中

2  
①  
L8  
断  
山代の

山代ヤマシロの①初（傍書）

3  
①  
L10  
断  
小山田の

小山田ヲヤマタの初ハツメ（傍書）

4  
①  
L11  
断鹿猪田もる  
(傍書)

鹿猪<sup>シ、タ</sup>田もる初  
(傍書)

鹿猪田もる中再（傍書ナシ）

5  
①  
L2  
  
断  
したにきる

は  
①  
②

2から4は万葉集の傍訓の有無であり、4だけをみると傍訓の有無という点からは初撰本に近い事になる。しかし、2・

3では初撰本にのみ傍訓が残る。これをもって初撰本系統であると断ずることは出来ないが、傍訓の有無は初撰本系統の特色の一つであることも確かである。5は、再撰本間にも異同があり、「は（八）」と「る」、あるいは「は（波）」と「る（流）」の字形の類似が原因であろうかとも思われ、除外してよからう。こうしてみると、断簡は現存本のいずれの系統とも断じ難いようである。ただ、1の異同についてみるに、古来風体抄上巻の万葉集各巻抄出の巻末部分には、

已上第一卷・已上第二卷・・・已上第十九卷・萬葉集卷第二十抄之了

のようにあり、初撰本・中間本・再撰本いずれもほぼ同一である。ただし、再撰本の中には、宮内庁書陵部蔵本を底本とした日本歌学大系本所収本文では、

已上第一卷之内・已上第二卷之内・・・已上第十九卷之内・萬葉集卷第二十抄之畢

としている。初撰本と中間本では、現存数が少ないこともあろうが、「之内」が記されている伝本は確認できない。しかし、再撰本のなかには、同一の本文を有する伝本も確認できるわけである。消極的根拠ではあるが、これをもってすれば、当該伝蜷川親当筆切を再撰本の系統であろうと推測できなくもない。ただし、管見に入ったのがただ一葉であり、確定的ではない。現時点においては、当該伝蜷川親当筆切の本文系統を、断定的に決することは避け、系統未詳と考えておく。ツレの出現を俟って検討すべきであることはいうまでもないが、少なくとも現存伝本とは完全に一致するとはいえない本文を持つ伝本が存したことは確かであろう。未知なる享受本文の存在を示唆するものと考えてもよいのではなかろうか。

以上、古來風体抄の古筆切三種十三葉について述べた。

俊成自筆本の存在は、広くは知られておらず、この自筆本が近世初期に転写された他は、初撰本系の本文は確認できていなかった。が、伝後光厳院筆切は自筆本と同じく初撰本系統であり、その稀な本文を伝えている。伝高倉永康筆切は、現存再撰本のほとんどが近世期の書写本であることを鑑みるに、室町中期にまで遡る当該断簡は、再撰本中では現存最古の断簡として、その資料的価値を認めることができよう。また、伝蟻川親当筆切は、現時点で系統の明確化は難しいが、室町期における享受本文の實際を伝える断簡として看過できまい。

俊成自筆本の出現によって依拠すべき本文が決定的になったことは確かである。しかし、その享受という観点からは、いかなる本文が中世に流布していたのかは明確ではない。その實際を伝えているのが中世期書写の古写断簡である。

(1) 『日本歌学大系 第二卷』（風間書房 昭和三十一年七月）解題。

(2) 『日本歌学大系』に拠る。

(3) (2) に同じ。

(4) 『歌論集一』（昭和四十六年 三弥井書店）解題。また、中間本本文は、同書に拠った。

(5) 詞林采葉抄の本文は、冷泉家時雨亭叢書『詞林采葉抄 人丸集』（平成十七年 朝日新聞社）に拠り、片桐洋一氏監修・ひめまつるの会編著『詞林采葉抄』を参照した。

(6) 周知の如く俊成自筆本を虫損に至るまで緻密に再現した転写本で、『日本歌学大系』の「初撰本」の底本。

(7) 本文そのものの引用としては、氣付き得た範囲では、八雲御抄に

「俊成古來風躰抄云、雖有<sub>レ</sub>兩説、彼心引<sub>二</sub>長歌<sub>一</sub>歟。崇徳院御時、短歌ト被<sub>レ</sub>出、人皆詠<sub>二</sub>長歌<sub>一</sub>云々。」

「俊成古來風躰曰、八病中是ぞ可<sub>レ</sub>去。其残はさりあふべきにあらずと云々、

井蛙抄に

「古來風體云、歌のよきことをいはんとしては、四條大納言公任卿はこがねのたまの集となづけて、通俊卿の後拾遺の序

には、ことばぬひもの、ごとくに心うみよりもふかしなど申ためれど、かならずしものにしきぬひもの、ごとくならねども、歌はたゞよみあげもし詠もしたるに、なにとなく艶にもあはれにもきこゆることのあるるべし。もとより詠歌といひて、こゑにつきてよくもあしくもきこゆるものなり。」

「古來風體云、萬葉集の歌はよく心をえてとりてもよむべき事とぞふるき人申おきたるべき。」  
近來風体抄に

「古來風體抄云、ひぢてと云ふ詞、今の世にはふりてや侍らん。つも、かも、べらなりなどは、さる事にて、かやうなる詞なほ侍る也。」

などがあるが、思いの外少ない。

(8) (1) に同じ。

(9) 小林強氏「歌論・歌字書の古筆切について」(平安文学論究会編『講座平安文学論究 第十五号』平成十三年 笠間書房)

(10) 冷泉家時雨亭叢書『古來風体抄』(平成四年 朝日新聞社)に拠る。

(11) 小松茂美氏『国宝手鑑翰墨城 付録総説・解題』(昭和五十四年 中央公論社)。同解説には「表裏ともに、ここに貼られた古筆切には、いずれも古筆家歴代の極札は一枚もない。いずれも、小さな紙片に古筆了仲の手で、伝称筆者名を記すにすぎない。」とある。なお、同じく小松氏の『古筆学大成』では「尾張切」の名称は用いられていない。

(12) 他にも、寂超の項、二条為重の紹智切の項、津守国冬の四半切の項などに同様の抹消がある。

(13) 『古筆家秘書』『古筆切目安』は伊井春樹氏他編『新版古筆名葉集』(昭和六十三年 和泉書院)に拠り、『古筆切名物』は武田則夫氏『翻刻古筆切名物』(MUSEUM 第二三六号 昭和四十五年十一月)に拠った。

(14) 高城功一氏所蔵切については、小林氏よりコピーを提供いただいた。伝高倉永康筆切②も同様である。記して御礼申し上げます。

(15) コピーに料紙の境目が写っていないため、縦寸不明とする。ただし、他のツレと大きく変わるものではない。





いふやうにうへて意を得たまゝ、ふんそくになに  
かふしとしは優にまゐる所々をねにふふた。ま  
ごのまゝもなぐははうてうしむのふんそくを  
こゝにもは古今集の舞くうのふんそくの中へ

古今集

春歌

あつしうに春をうけりて目よめり

在原方

棟梁男 重孫

年のうら春にうけりて目よめり  
いふやうにうへて意を得たまゝ、ふんそくになに



はつひさ

あはれとくのかみふさうへんふのしらべはたふ

冬哥

題しつ

後人不知

宿雪の月くひわしじきまはけえ水うちあふり  
ひみねうねもくはひさのあまねるまのふたれ  
い無人のうきこも

雪あふくうのくねあふうけにみねねく

恋哥

和柄のふくむしーとちーわーあのさ  
ーそいれいーなるぬ

ひーあ女のをふわいーにーうあまに  
うすれいーそあれ



伝高倉永康筆切

① 個人所蔵切

詞花和歌集

春

春日院中時百首ありあけき五春のう  
らけいふけりけり

大蔵卿道房

こけりけりあけきうらけいふけりけり  
寛和二年の裏平合

藤原惟成

あけきうらけいふけりけりあけきう  
天徳二年の裏平合

平家盛

あけきうらけいふけりけりあけきう  
り



百首歌集てふ所もあはさるるう  
わてふはる

藤原季道歌

うねふれなるうらりわらふもふはるのう  
わらふ院のせき百首はるるれのを  
うねふはる

河内

うねふれなるうらりわらふもふはるのう  
うねふはる

万葉のうらり



警余歌

くはかりすゝせうぬゝをきこゝま  
人のえらゝにほいそんぐも  
くゝをきこゝまゝんたはねにれ  
うたにありみゝろかたき

己と弟十一巻にゆ

空物陳思

山代いゝゝのゝまゝゝんたき  
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
床猪田ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ